

安全対策

平成25年1月
在フィリピン日本国大使館

1 基本的な心構え

(1) 生命と身体の安全を最優先に考える

凶器を使用した犯罪が多いとのフィリピンの犯罪の特徴を理解し、特に、襲われた場合は、相手が凶器を所持しているものと認識し、無理に抵抗したり、急に逃げ出したりせず、身体の安全を第一に考え落ち着いて行動する。

(2) 犯罪を誘発する環境を作らない

- ア 犯罪発生が高いと考えられる人通りの少ない路地やスラム街等には近づかない・立ち入らない
 - 普段、外国人が近づかない、立ち入らないようなところであれば、なおさら、予期せぬ犯罪に巻き込まれる危険性も高くなります。
- イ 路上の一人歩きには注意する
 - 夜間、特に深夜、人通りの少ない通りの一人歩きをしない。二人以上でも裏通りは歩かない。
 - 昼間でも徒歩で外出する際には、常に誰かにみられていることを念頭に身の回りにはくれぐれも注意する。
 - 夜間の移動は、徒歩で行ける範囲にある場所でも、出来るだけ自家用車を利用する。
- ウ 襲われた場合、不用意に上着やズボンのポケットに手を入れない
 - 拳銃やナイフ等凶器を取り出すのではないかと誤解され、危害を加えられるおそれも否定できない。

(3) 周囲の雰囲気には溶け込む

服装、持ち物は、周りの環境に溶け込むような、なるべく目立たないものにする。

- そもそも高額な装飾品や華美な服装を身につけているだけで目立ち、過度に注意をひくことにつながるので、時間、場所、場合を考えて身につけるかどうかを判断する。見せびらかすような行動を慎む。

(4) 犯行のチャンスを与えない（油断しない）

- ア 多額の現金は持ち歩かない，高価な貴金属は身につけない。
- イ 不必要なものは持ち歩かない。（例：普段，使用しないクレジットカード，日本のキャッシュカード，高価な腕時計，貴金属，装飾品等）
- ウ 鞆等持ち物を車道側の肩にかけたり，持って歩かない。また，たすき掛けにする場合は，本体を背中の方に回さない（身体の正面で持つ）。
- エ 持ちものから目を離さない。
- オ（特に男性）ズボンの後ろポケットに無造作に財布を入れない。
- カ むやみに人前で財布を取り出さない。
- キ 家族で外出し，家族分の財布，ID等をまとめて持つ場合には，自分一人の時以上に身の回りに注意する。
- ク 短時間車両を離れる場合でも，トランクとは言え車内に貴重品を残さない。
- ケ 地元の地理や事情に詳しい，又は言葉（英語，タガログ語）が出来るからといって大丈夫と過信しない。

(5) 見知らぬ人を安易に信用しない

見知らぬ人に声をかけられても（日本語であればなおさら），毅然とした態度でこれに応じない（笑顔で対応するとつきまとわれる）。

- ア 観光名所等で言葉巧みに話しかけられても，狙われていると考えて相手の誘いに乗らない。特に，日本語で話しかけてくる人物には，男女を問わず警戒する。
- イ 知り合ったばかりの人の誘いにのって，その人の家に行ったり，泊まったりしない。
- ウ 家族の事故等を理由に多額の振り込みを指示するような電話を受けた場合には，電話内容を安易に信じることなく，本人や所属先を含めて事実関係を確認する。

(6) 行動パターンを予知されない

毎日の通勤ルート，時間等日常の行動パターンがワンパターンになっていないかどうか見直し，随時変更することも検討する。

(7) 何人に対しても暴力的な言動をとらない（日頃から恨まれないように注意する）

フィリピンにおいては，誰に対してであろうと，公衆の面前で罵倒し，恥をかかせるといった行為はタブーとされている。また，たとえ，家族に対し

ても、暴力的な言動は嫌悪され、場合によっては警察沙汰に発展する。（従業員を他の従業員の面前で叱責したために暴行を受けた例や、自分の配偶者や子を叱るあまり、手をあげてしまい、訴えられた例などもある。）

2 テロ対策

フィリピンにおいては、イスラム系反政府勢力（モロ・イスラム解放戦線（MILF））、モロ民族解放戦線ミスワリ派（MNLF-MG）、イスラム過激派勢力アブ・サヤフ・グループ（ASG）、ラジャ・ソレイマン・イスラム運動（RSIM）等）や共産系反政府勢力（新人民軍（NPA）等）が存在し、これまで、主にミンダナオ地方で無差別爆弾事件、身代金目的誘拐事件、襲撃事件等のテロ活動を展開している。

一方、マニラ首都圏においても、事件の背景や犯人の逮捕には至っていないが、マカティ市の幹線道路で死傷者を伴う路線バスの爆破事件、マカティ市サルセド・ヴィレッジ内空き地で迫撃砲弾を利用して造られた即製爆弾が爆発し、付近に駐車していた車両数台と建物の窓ガラスが損壊する事件等が発生している。また、実際の爆発事件ではなくても、爆発物を仕掛けたとの脅迫が寄せられ、その場に居合わせた人々が治安当局の指示で避難したケースも見られる。

特にマニラ首都圏でテロ事件が発生すれば、それ自体、テロリストにとっては国際的に存在を示すことになる。世界的にテロの脅威がなくならない中で、以下の諸点に留意しながら、日頃から注意を怠らないことが大切である。

【具体的対策】

（1）情報収集

日頃からフィリピンの政治、社会情勢に関心を持ち、情勢の推移を報道等でフォローする。

（2）警戒強化

ア ハードターゲットのみならず、ソフトターゲットにも注意

テロリストは、テロの標的として、軍関係施設や主要外国政府関連施設等のハードターゲットに限らず、外国人を含む不特定多数の人が集まる場所（公共施設、レストラン、ショッピング・モール、ナイトクラブ等）及び公共交通機関などソフトターゲットをも対象とする傾向がありますので、くれぐれも身の周りに注意する。

イ 祝祭日等象徴的な日に注意

かつて、比の祝祭日にあわせて、テロ（爆発）事件が発生したこともありますので、比にとって象徴的な日には普段以上の注意を払う。

【参考】万が一、テロ事件に遭遇した場合の心構え

- 1 パニックにならない。
- 2 身近に爆発音を聞いたら、姿勢を低くして周囲の状況を確認後、退避する。（退避用に非常口を予め確認しておく。）
- 3 居合わせたビル等に爆弾が仕掛けられたとの状況においては、治安当局、ビル管理会社の指示に従い速やかに退避する。

3 誘拐対策

【原則】 「ターゲットにされない、隙を作らない」

- 日頃から、使用人を含むフィリピン人に恨まれたり、憎まれたりしないよう言動に十分注意し、金銭トラブル等が発生しないよう心がける。
- 名前、自宅住所、電話番号（固定、携帯とも）並びに家族構成、行動予定等の情報は必要な人以外には教えない。
- 資産を持っていることを他人に悟られない。目立たないようにする。

【予防策】

(1) スキを作らない

ア 住居の確認（→不法侵入対策にもつながる）

- (ア) 戸締まりが万全か否か。
- (イ) 家屋に構造的な欠陥がないか否か。（→ある場合は早急に修善するなどの対策を講じる）

イ 使用人への注意

家族を含めた行動パターンは全て使用人に知られており、使用人を通じて外部に情報が漏れる虞があることを念頭に、以下の点を指導しながら信頼できる関係を築きつつ、不必要な情報は流さない。

(ア) 電話対応

- ①こちらから名乗らせない。
- ②家族の連絡先（携帯電話番号）を勝手に教えさせない。
- ③家族の行動パターン（出勤、帰宅時間等）を勝手に教えさせない。

(イ) 来客対応

①来訪者を確認せず自宅に入れさせない。

②（使用人自身の）友人知人を勝手に自宅に入れさせない。

ウ 日常行動のパターン化に注意

（ア）本人及び家族の行動が簡単に予知され易い状態にないか。

（イ）会社への出退勤時間並びに経路及び週末の行動はパターン化していないか。

（ウ）子供がスクールバスを利用せず，学校への送り迎えを自家用車で行う場合，運転手，メイド任せにしていないか。時間帯，経路がパターン化していないか。

（エ）子供だけが戸外で遊んでいたりと，一人で外出することはないか。

（2）不審な兆候を見極める

「誘拐の場合は兆候の発見が防止の鍵」

ア 自宅周辺や事務所で不審な人物，車両を見かける等日常生活の中で普段と違ったことはないか。

イ 尾行されている，遠くから写真（ビデオ）をとられているようなことはないか。

ウ 無言電話や間違い電話等不審な電話が続いていないか。

（3）家族（配偶者や子供）・使用人と予防策について十分情報を共有する

ア 配偶者や子供にも必要最小限の予防策の説明をしているか。

イ 使用人の協力も必要不可欠であり，定期的にも上記予防策について確認しているか。

【参考】不幸にも誘拐（疑い）事件が発生してしまった場合の留意事項

・情報共有と情報管理

関係者による速やかなる情報共有をはかる一方，組織内であれ，情報に接することのできる範囲を限定し，不特定多数が情報を共有することのないよう徹底する。

・大使館への通報

大使館は，本人の家族や所属組織に代わって，犯人側との交渉は行いません。但し，フィリピン政府，治安当局等に対して人命第一に慎重に対応するよう申し入れを行い，その後も，事件解決まで当地関係者との間で連携しながら，出来る範囲での支援を行います。

・ 本人や犯人側からの連絡への対応

→対応者を事前に決めておく。

→被拐取者が本人であるかを含めて生存確認(Proof of Life)を求める。

【例】 個人的質問を行う

本人が架電した日を含め最新の新聞を持った写真を送付するよう伝える。

→会話を録音できるような録音装置（ボイスレコーダーなど）を設置する。

・ マスコミ対策

当地においては、誘拐事件とはいえ、警察が各種事件事故の被害者の人定事項等を公表することが珍しくないため、警察に通報する際には、誘拐の発生事実はもとより、人定事項等をくれぐれも公表しないよう強く申し入れるようにする。また、大使館からも警察本部に対して、マスコミ対策を慎重に行うよう申し入れる。

4 企業における安全対策

【企業に対する犯罪の形態】

フィリピンにおける企業犯罪の形態は、イスラム系反政府勢力や共産系反政府勢力などによる恐喝、脅迫・強要、誘拐及び爆弾テロ、「怨恨」による恐喝、脅迫・強要、誘拐、「不良邦人」による恐喝、脅迫・強要、誘拐等が考えられる。

【具体的対策】

(1) 恐 喝

ア 対応は概ね次の3つに分類

→事実関係を確認し、早急に対応を見極める。

(ア) 警察に届ける

(イ) 犯人の要求にしたがう

(ウ) 無視する

イ 企業恐喝に対処するうえで見極めるべき重要事項

(ア) 相手の正体（本物か、悪戯か）

(イ) 相手の身分（ゲリラ、犯罪組織、個人、不良邦人、素人等）

ウ 嫌がらせか本物かの見分け方（主に電話）

次の場合は本物の可能性が高いと考えられる。

- (ア) 弱点の指摘（会社の落ち度を個々に指摘するなど）
- (イ) 要求（具体的な金額の要求，物品の要求）
- (ウ) 要求にしたがわなかった場合の危害の告知
- (エ) 名前を名乗る

エ 具体的検討事項

- (ア) 指摘（落ち度，弱み等）内容の調精査
- (イ) 指摘内容が公知の事実であるか否か
- (ウ) 要求の内容を精査（金銭か金銭以外のものを要求しているか）
- (エ) 要求が金銭の場合，落ち度等とのバランス
- (オ) 要求にしたがわなかった場合，危害の告知と要求金額とのバランス
- (カ) 危害内容の告知

オ 事件発生時の対応（初動体制）

- (ア) 事件発生時の早期確認と事実関係の認知
恐喝の形態，相手の身分，本物か偽物かの見極め
- (イ) 関係機関との連絡・協議
 - ア 大使館への通報
 - イ 治安機関への通報・依頼はハイレベルで実施
- (ウ) 犯人からの連絡への対応
 - ア 電話録音用装置（テープレコーダー，ボイスレコーダー）の設置
 - イ 犯人像及び本物か偽物かの見極め

カ 直接乗り込んで来て恐喝する場合

基本的な対応は同じ。但し，接客室に録音器を設置し，（特に，双方の対話内容，相手の言動を）録音する。

(2) 威力，偽計を用いた脅迫・強要

脅迫・強要対策も恐喝の場合と同じですが，この種の事案が発生した場合に一番重要ことは，相手の正体を見極めること。また，相手を見極めると同時に関係機関に通報し，初動体制を確立することも重要。

脅迫，強要事案の信憑性の判断基準及び爆破予告対策は次のとおり。

ア 脅迫，強要における信憑性の判断基準

- (ア) 要求の有無
ただの脅迫よりも強要（要求を伴う）の方が信憑性は高い。
- (イ) 理由の有無
脅迫，強要にも落ち度の指摘を伴うものと，ただ脅すだけの場合では，前者の信憑性の方が高い。
- (ウ) 危害の告知

- ①企業に対する脅迫の場合，社員殺害予告は，一般的に信憑性は高くない。
- ②社員誘拐も信憑性は高くない。
- ③爆破，放火はケース・バイ・ケースにより判断
- ④商品の欠陥，商品に汚物，針等を入れる等の告知

【参考】告知された内容に畏怖するだけで脅迫は成立していると考えられる。

イ 脅迫の1形態としての爆破予告

(ア) 爆破予告への対応（鍵を握るのは最初に電話に出た人）

- ①予告事実を早く上司に報告し，対応策を考える。
- ②出来るだけ多くの情報を引き出すより，☆何処に仕掛けたか，☆何時爆発するか等の必要最低限のことを聞き出し，早く避難するのが原則。
- ③責任者は警察に通報し，避難を指示する。
- ④避難先を指示する。

(イ) 悪戯と判断される爆破予告

- ①相手が泥酔している場合。
- ②相手が子供の場合。
- ③相手が当方の会社名や業務内容等を知らない場合（適当に番号を回してかけてる）

ウ 爆発物の威力

次の3つの効果があるとされ，爆発物に対処する鉄則は，一步でも余計に爆発物から遠ざかることで，決して興味本位で爆発物に近づかないようにしてください。

(ア) 爆風効果

爆発物が爆発すると爆心から外へ衝撃波が発生し，その圧力は爆心から数メートルの位置で1平方センチあたり100トンにも達する。

(イ) 焼夷効果

爆発速度の遅い火薬類が爆発すると火災が発生する。

(ウ) 破片効果

爆弾が爆発すると爆弾本体等が飛び散り，爆心から数メートルの所で秒810m位になる。破片が人に命中する確率は，直立していた場合を100とすると，中腰になれば66，爆心に対して直角に伏せたら33，真直ぐ伏せると15になる。

以 上